Sheldon Gellar,

Democracy in Senegal : Tocquevillian Analytics in Africa.

New York : Palgrave Macmillan, 2005, x＋297pp.

岩田拓夫（いわた たくお）

はじめに

書名のとおり，本書は19世紀前半のアメリカの民主主義を研究したトクヴィルの手法を踏襲しながら，セネガルの民主主義を読み解いていくことを目的にしている。

序章において，著者は研究・勤務フィールドとしてのアフリカ（セネガル）との出会い，民主主義研究におけるトクヴィルの作品との出会いについて述べている。著者とセネガルとの関係は，独立の余韻残る1962年以来40年以上に及ぶ。また，著者は政治研究者としてだけでなく，開発コンサルタントという立場からもセネガルと密接な関係を維持してきた。

以下の12の章において，本書はアフリカの民主主義研究におけるトクヴィルの方法論について解説を行い，それを踏まえてセネガルを中心とするアフリカの民主主義について分析を試みている。

Ⅰ　本書の内容

第１章　アフリカにおけるトクヴィル的分析

著者は，上からの秩序構築や選挙に基づく手続き的民主主義論を重視するアメリカの政治学者ハンチントンと批判的に対比させながら，自律と平等を重視し，地方政府と政治への市民参加を通じた分権的な民主的秩序の構築を重視したトクヴィルを高く評価する。

トクヴィル的な政治分析のアプローチを構成する要素として，(1) 文脈上の要素（地理的・環境的関連，歴史），(2) 社会文化的要素（社会的平等，慣習や価値，宗教，言語），(3) 政治的要素（地方行政の自由，共同体の自律，結社の自由）を挙げた。

第２章　研究の出発点

著者によれば，多くのアフリカに関する民主化研究には，前植民地時代の政治制度，文化，行動様式に関する分析が欠落している。例えば，口承伝承によれば，少なくとも11世紀ごろには現在のセネガルに様々な人々が到来していた。当時のセネガル社会は高度に分権的であり，地方の政治共同体で徴税，兵の補充，他の統治者との同盟締結などが認められていた。

本書では，セネガルにおいて，トクヴィルがアメリカでみたアングロ・アメリカ人のアナロジーで語られるのは，ウォロフ人である。ウォロフ社会では様々な階層が生み出されたものの，社会階層と政治権力や富との関係は固定的ではなかった。

第３章　旧秩序と植民地主義

フランスによる植民地支配は，セネガル社会を根本的に変えた。黒いフランス人を作り出すというフランスの同化政策はほとんど実行されず，優等人種が劣等人種を支配する植民地統治が行われた。

伝統的首長は，政治権力を剥奪され，秩序維持と徴税を担うだけの存在となった。指導者マラブーに率いられた宗教勢力は当初フランス植民地政府と対決姿勢を取っていたが，やがて協力的になった。その代表が，アーマドゥ・バンバ率いるムリッド教団であった。フランス植民地政府は，４つのコミューンに限られたごくわずかの市民と圧倒的多数の臣民とを明確に区別し，平等や人権尊重とは程遠い支配を行った。独立後のセネガル政府は，主権を回復しつつ，植民地時代と同様に権力の集中をはかった。

第４章　中央集権と民主主義的専制

独立後のアフリカ諸国では，国民の総意としての一党制が導入され，権力の集中と反対者の排除が行われた。フランス植民地機構を引き継いで，新たな官僚エリートを生み出しながら集権的な政府機構を維持した。内務省の権限強化と，地方政府の権限を

抑制した。経済活動，開発も中央政府中心に進められた。

そのようなセネガルにおいても，1990年代に入り地方分権化が開始されることになった。分権化自体はすべての社会層に受け入れられたが，分権化政策を主導したのは中央政府であり，上からの分権化という性格は否定できない。そのため，分権化の効果は中央政府の官僚機構の内側まで及んでいない。

第5章　地方行政の自由

植民地時代前のセネガルの諸王国の政治構造においては，公式な地方政府は存在せず，コミュニティーは自律性を維持してきた。植民地時代に特権的な地位を保障された4つのコミューンでは評議会の設置が認められ，選挙が行われるようになった。しかし，このような地方政府における市民的自由の獲得は，ごく限られたセネガル人にしか認められなかった。

1996年に制定された分権化法によって，再び地方行政への住民の直接参加の道が開かれた。国の地方への監督権が減少した。また，農村部の評議会の権限も増え，村長と協議しながら，予算や土地処分を実施する自律性が増した。

第6章　政治組織，政党，報道

独立後，サンゴール大統領への権力集中が進み，多党制から一党制への移行とともに野党勢力が姿を消すことになった。しかし，1970年代に入り，再び野党の活動が認められ，三党制に移行するに伴い，政府系ではない新聞も登場するようになった。1990年代に入り，政党数は70を数えるようになり，政界再編も起こるようになった。2000年の大統領選挙では，セネガル社会民主党のワッド候補が変革を掲げて政権交代を実現した。

非政府系新聞，メディアの発展により，政治に関する情報が増加・多様化し，市民の政治意識向上に重要な役割を果たした。政治が，政党，イデオロギー主導で動く時代は終わった。1980年代後半以降，高学歴の市民社会のリーダーは政治的にも注目される存在となった。

第7章　組織についての技術

トクヴィルが，政府が政治組織を禁止すれば，市民組織の活動も衰退すると指摘したように，政治組織・活動の自由と発展は市民組織活動の発展に密接に関係している。セネガルは，フランス領アフリカのなかでも最も市民組織活動が活発であり，それは農村部よりも都市部に当てはまった。

第2次大戦後，臣民の地位が廃止されたことによって権利が拡大し，さらに組織活動が活性化した。近年では，西欧式教育を受けたエリートによって構成されたNGOが活動を拡大し，ロビー活動を強化した。また，ドナーからの資金支援を直接受けるNGOも増加した。

第8章　宗教の精神

トクヴィルが言うように宗教は人間の性質の本来的な一部分であり，民主主義の時代にあっても存在し続けるだろう。1970年代以降，ムリッドなどの教団は大学などの高等教育を受けた青年層の組織化に着手した。

これまでセネガルでは圧倒的なムスリム人口を抱えながらも，宗教が政治的な対立軸となることはなかった。しかし，マラブーが1980年代あたりからより直接的な政治的関与を強めるようになり，ムスリム神秘主義教団創始者の子孫が政治家になるケースも目立つようになった。マラブーの支持は，大統領選挙の行方も大きく左右するようになった。マラブーの支持がワッドの勝利に影響したとみられている。

第9章　言語

トクヴィルによれば，言語は人々をつなげアイデンティティを強固にする。セネガルの多言語運用は，社会の分裂をもたらすものではなく，むしろ人々の協働とセネガル文化を豊かにする大いなるコミュニケーションを強化するであろう。

植民地時代には，フランス語は就職，エリートへの切符の意味を持っていた。しかし，1980年代以降，公共部門の縮小とともにフランス語の習得がエリート社会への参入に持つ意味が減少した。その一方，インフォーマルな経済活動が拡大するなかでリンガフランカとしてのウォロフ語の重要性が認識されるようになった。政治運動でも，demokarassi（民主主義），Sopi（変革）などウォロフ語で訴えられることが増えている。

第10章　公平性

セネガルにおいては，フランスによる植民地支配によって，旧来の貴族的秩序が崩壊した。フランスによる軍事的征服によって，奴隷主から解放された元奴隷は新しい土地に移住し，商品作物である落花生栽培に従事した。

セネガルでは，前植民地時代に貴族の女性が政治や統治者選出に関わってきた伝統もあり，現在でも女性の投票率は高いが，独立以後サンゴール政権において女性の国会議員，閣僚は少なかった。時間の経過とともに，高学歴の女性が増加し，政界，官僚への進出が起こった。女性閣僚も増加した。その一方，地方では女性への教育はそれほど普及せず，女性の活動は経済，生活向上に向けられる傾向にある。

第11章　セネガルの民主主義の総括

セネガルの民主主義の輝かしさは，多民族共生のなかでの民族間の交流を通じた民族的な寛容性，ムスリムが絶対的多数を占めながらもキリスト教との平和的な共存を実現し，暴力に反対してきた宗教的な寛容性，世俗国家の維持，報道の自由が順調に発展し，影響力を拡大してきたこと，組織活動の自由（様々な社会層，都市と地方の格差の縮小，組織間の協働），カーストや奴隷制に起因する社会の不公平さの縮小，によってもたらされている。

セネガルの民主主義に関するトクヴィル的分析の総括としては，現在も大統領，中央政府への権力の集中，個人化の側面は残っているものの，セネガルの民主主義はもはや西欧的教育を受けた一握りのエリートの手に委ねられてはいない。

第12章　アフリカの民主主義の将来

独立後のアフリカ諸国の国民国家建設は失敗した。アフリカの民主主義と市民社会の関係を議論するには，欧米的NGOに注目するだけでなく，コミュニティーベースの組織を考察しなければならない。

現在もアフリカ政治は，大統領に権力が集中しているが，軍事独裁体制は減少している。言論や組織活動の自由も拡大している。国家の介入を減らし，地方コミュニティーの発展を促すことが重要である。草の根組織では，西欧的市民社会よりも民主的なガバナンスが行われている。

現在のアフリカの分権化は上からのものにとどまっている。女性や若者の社会的地位についての変化が起こり，社会的平等が改善されている。寛容な宗教は，民主主義や人権の改善に親和的で，民族紛争の克服にも期待される。ヨーロッパ型の民主主義の押し付けではなく，経験から学びながらアフリカ独自の民主的革命に取り組む必要がある。

Ⅱ　本書の意義とコメント

本書の最大の意義は，著者自身が強調するように，セネガルを中心とするアフリカの民主主義に関して，選挙に代表される政治過程に限定することなく，長期的で包括的な視点で理解しようと試みている点にある。

著者によれば，トクヴィルに依拠しながらアフリカの民主化プロセスを理解することの利点は，欧米の研究者にみられがちな没歴史的で国家中心的な視野狭窄から脱却できることである。アフリカの民主化研究における没歴史性，国家中心主義への批判は，評者の自戒を含めて，真摯に受け止める必要があろう。

ともすれば，アフリカの民主化研究は，多政党制への移行以後の選挙プロセスや政治的意思決定プロセスに注目が集まりがちであったが，現代の政治現象が歴史と切り離されて存在する訳ではなく，さらに時の社会的状況にも左右されることを重視する著者の姿勢は首肯できる。

また，著者が40年以上に及ぶ半生を通して，歴史，風土，文化，宗教，言語などの複合的な視点からセネガル政治を描きだそうと試みた本書は，民主主義研究に資するだけでなく，セネガル全般について理解したい人にとっても導入的な本となろう。

このように重要な指摘がなされ，示唆に富む本書ではあるが，読み進むなかで違和感を覚える部分も少なくなかった。これらは，本書の意義を減ずるものではないが，次のように指摘したい。

本書では，セネガルの民主主義を理解する上で，先行研究の没歴史的傾向を批判し，歴史を考慮に入れる重要性を強調している。しかし，本書のなかで

は基本的な歴史的事実を羅列しながらも，現代政治への直接的なつながりに関する説得力に乏しい。例えば，セネガルが大きな内戦を回避し，民主主義を発展させることができたことを説明する歴史的根拠は必ずしも示されていない。

次に，著者はアメリカ社会の平等さと，その裏側に厳然と存在する排除との矛盾を注視したトクヴィルの議論を一面的に理解している。トクヴィルは，フランスの貴族でありながらも，対極的な境遇にあるアメリカ社会のアフリカ系奴隷や先住民といったマイノリティーの状況についても関心を向けた。それが，アフリカ研究にとっても『アメリカの民主政治』という作品が価値を持つ点であるはずである。しかし，著者はトクヴィルを賞賛しながらも，自身のアフリカ研究において排除を包摂した平等という矛盾には向き合おうとはしていない。それは，トクヴィルが強調する平等の概念に関して，安易にアングロ・アメリカンのアナロジーでセネガルのウォロフ人を語ろうとする姿勢に表れている。

本書では，「アフリカ的」，「セネガル的」価値を重視するとしながらも，具体的にそれが何であるかは示されていない。セネガルの民主主義は，欧米のレプリカではないと繰り返し述べながらも，本書の議論は著者が批判する欧米中心的見方と大きな相違はない。セネガル社会の内的な特徴や発展の可能性を強調しながら，援助関係者としての外部からの視点に拘束され，セネガル社会の具体的な変化を捉え切れていないようにも思われる。

最後になるが，一部の援助供与側に蔓延する分権化信仰にも疑問がある。果たして，著者が言うように，地域コミュニティーは無条件に都市部よりも平等で民主的であるのだろうか。そこには，中央政府から地方政府への分権化プロセスに付随して噴出する政治的問題に関するまなざしはない。分権化による地方政治の変化や矛盾の顕在化こそ，分権化時代のアフリカの民主主義が直面している大きな課題であるはずである。

以上のように，本書はセネガル政治を包括的に議論し，読者にアフリカの民主主義研究に関して様々な論点をなげかけている。

文献リスト

＜日本語文献＞

トクヴィル，アレクシス1987.『アメリカの民主政治（上・中・下）』（井伊玄太郎訳）講談社学術文庫.

＜英語文献＞

Schaffer, Frederic 1998. *Democracy in Translation : Understanding Politics in an Unfamiliar Culture*. Ithaca : Cornell University Press.

（宮崎大学教育文化学部准教授）